

ラテン語の味わい

——格と前置詞——

野村圭介

I

これは私のラテン語入門である。筆者は、インド・ヨーロッパ語族の諸言語のなかでも、フランス語を主に、もっぱら近代西欧語ばかりに長年親しんできた。そしてたまたま近年、ようやくにしてラテン語に接する機会を得たのであるが、すでに生命を終えたこの二千年前のローマの言葉に、私はしばしば強くひきつけられるものを感じた。その古色蒼然にもかかわらず、またその晦渋難解にもかかわらず、いっそ新鮮ともいえるような驚嘆の念を覚えることがままあった。ひとつにはそれは、フランス語を通して、フランス語でしるされた辞書、文法書、対訳書等々をたよりにラテン語を学習した故でもあろう。すぐれて分析的な近代語であるフランス語を通して、総合的言語の雄であるこの古代言語をかいま見たせいでもあろう。周知のように、フランス語はイタリア語やスペイン語などと共に、ラテン語を直接の祖と仰ぐ。その語彙にいたっては、優に80パーセント以上がラテン語系とされる。しかしながらこの両者から受ける印象は実に異なったものがある。試みに一冊の文法書をひもとけば、「完了」の項に、

Vixit.

とただ一語あり、その傍らに、*Il a vécu (Il est mort)*. 「彼は生きた（彼は死んだ）」と仏訳がつけてある。つまり、一人の人間が今しもその生を閉じた、という事実を表現するために、動詞 *uiuere* の直説法完了三人称単数形を用いてただ、*Vixit* ウィクシットとのみ言うのだ。一語で、強く、簡明に。あたかも、厳しい環境、条件のもとで、今しもストイックな生涯を終えた一個の古代人を彷彿とさせるがごとく……などといえ、いささか思い入れが過ぎるであろうか。この文——一語といえども立派な文——に続いて、

Athenis vixit.

と例文があり、*Il vécut à Athenes*. 「彼はアテネで暮らした」とある。*Athenis vixit*, アテーニス ウィクシット。代名詞を用いず前置詞を用いず、一個の名詞と一個の動詞を無造作に、しかしかっちりとして並べて見せただけの文章。まるでイタリア特産の、あの固くて白い大理石の切石を二つ並べたかのように。

フランス語の等位接続詞 *et* に相当するラテン語は同じく *et* (*ac*, *atque*) である。*Le père et la mère*. 「父と母」は *pater et mater* であり、近代西欧語では例えば英語が *and*, ドイツ語は *und*, イタリア語は *e* を用いてどれも同じように表現する。が、ラテン語にはこの「～と～」といった並列的表現法に加えて、もう一つ別の言い方がある。すなわち前接辞 *enclitique* としてのみ用いられる接続詞 *que* を使い、「父と母」はまた *pater materque* とも言うことができるのである。私はローマの言葉に特有の、この接続詞 *que* に少なからぬ衝撃を受けたのであるが、例えば、ウェルギリウス *Vergilius* の余りにも有名な叙事詩『アエネーイス』*Aeneis* はこんな風に始まる。

Arma uirumque cano……

アールマ ウィルムクゥエ カノー「私は歌う、戦いと英雄を」*Je chante les combats et le héros*. と一応訳することができよう。だが、*arma uirumque* は断じて *arma et uirum* ではない。意味するところは同じかもしれない。いや、厳密に言えば意もまたおのずから変わってくるのであろう。一方が、二個

の名詞を *et* を介して単に並べて見せるのに対し、他方は戦いと英雄の両者を一つにくくり、切り離し得ない緊密な一体として提示する。ローマ国家、全ローマを意味する *Senatus populusque Romanus* 「ローマ元老院とローマ人民」 *Le sénat et le peuple romains* という言いまわしがあるが、これも *senatus et populus* ではいささか困るのである。たがが少々緩むのである。キケロー *Cicero* は居並ぶ元老院議員たちに次のように呼びかける。 *Populi Romani nomen salutemque defendite* ⁽¹⁾。『ローマ人民の名と安全を守りたまえ』 *Défendez le nom et l'existence du peuple romain* と。

ラテン語は簡潔を身上とする。簡潔というより、むしろ「簡勁」といった方がより適切だろうか。一語一語が十全の意味を担い、無駄を排し、緊密に構築された古典ラテン語を形容するに、「簡勁な」という言葉ほどふさわしいものはなかろう。私は『新約聖書』の対訳書を初めてひもといてみた折の驚きが忘れられない。『新約聖書』の原典は、コイネー（共通語）と称されるギリシャ語でつづられているが、見開きの片方のギリシャ語原文と他方のラテン語訳を見比べると、後者のページが随分と余白の多いすっきりとした印象を与える。つまり、ギリシャ語とそのラテン語訳では使用語数に相当の開きがある。普通、翻訳すると、原文よりはどうしても語数が多くなり、忠実な訳ほど、やや冗漫な感じになるのが避けがたい。が、ラテン語に訳するとこれと全く逆の現象が生ずるのが面白い。しかも、4世紀末に成った、ヒエローニムス *Hieronymus* 訳のウールガータ *Vulgata* 版聖書のラテン語は、いわゆる黄金時代、キケローの時代のそれに比べて、いく分たがが緩んでいるとされているのだが。もっともコイネーにしても、たがは少々ゆるんでいるのではあるが。

泉井久之助は名著『ラテン広文典』のなかで、古代ローマの言葉は今日の西洋の言葉より「節約的」と言い、さらに、このために読解の手がかりが乏しくなり、解釈の困難、不確定が生じ、ラテン語はむつかしいという印象を

一般に与えている、と述べている。たしかに難解ではある。晦渋ではある。しかし「われわれは先ずみずからつとめて、ラテン人の言語意識に同化してゆかなくてはならない。でないかぎり、常にこの種の欠如に対する心許なさの上を進まなくてはならない」と語をつぎ、「西洋の近代の言語には、古典ラテン人からすれば、いわば余分なものが多い」と断じている⁽²⁾。

泉井が節約的と言うのに対し、ポール・ヴァレリー *Paul Valéry* は、ウェルギリウスの『牧歌』*Eclogae*に付した序文で、ラテン語は総じてフランス語より「密度が濃い」*plus dense*と言い、その密度のよって来るゆえんを、ごくおおざっぱに、冠詞を使わないこと、助動詞を節すること、前置詞を使い惜しむこと、の三点に求めている。ラテン語は、「同じ事柄をより少ない語数で言える」*Elle (la langue latine) peut dire les mêmes choses en moins de mots.*⁽³⁾ それに、語の配列に関しては、フランス語にはほとんど全く許されていない、羨望に耐えない自由を持つ、とヴァレリーは嘆じるのである。語の配列の問題はひとまずおき、われわれもまた、古代ローマの言語が、節約的で高密度であるゆえんを、フランス語と比べながら、いくつか例文をあげながら概観してみよう。

a) 冠詞

Milites pontem instituere coeperunt.

Les soldats commencèrent à construire un pont. 兵士たちは橋を築き始めた。

同じ古典語でもギリシャ語には定冠詞が存在するのに対し、ラテン語は一切冠詞を使用しない。近代西欧語には不可欠な冠詞の欠如は、歴史的にはより古い古代ギリシャ語よりも、しばしばラテン語に一段と蒼古とした趣きを与えるように思われる。

b) 所有形容詞

Lava manus.

Lave tes mains. 手を洗え。

所有形容詞は必要不可欠な場合以外には用いない。*J'aime mon père.* 「私は父を愛する」は単に *Amo patrem.*

c) 人称代名詞

Demonstrabo iter. Aurelia uia profectus est; si accelerare uolent, ad uesperam consequentur. (Cicero: In Catilinam, II - 6)

Je vais indiquer le chemin. C'est par la via Aurélia qu'il est parti ; s'ils veulent se hâter, ils l'auront rejoint dès ce soir. 私は道を教えよう。彼が出発したのはアウレリア街道からだ。彼等が道を急ぐならば、今晚にも追いつけよう。(『カティリーナ弾劾』)

引用のキケローの文では, *demonstrare*, *proficisci*, *uolere*, *consequi* の四つの動詞の変化形に, すべて主語人称代名詞が略されている。省略というのは適切ではなかろう。変化語尾のみで単複人称の区別が明瞭故, 代名詞を必要としないのである。*J'aime les vers.* 「私は詩が好きだ」は, *Versus amo* で必要十分なのであり, これに主語人称代名詞一人称単数の *ego* をつけ, *Ego versus amo* とすれば, ことさら私を強調することとなり, *Moi, j'aime les vers.* もしくは *C'est moi qui aime les vers.* とでも表現しなければならないだろう。

同様に非人称構文においても主語をおくことをしない。*Il pleut.* 「雨が降る」は *Pluit.* *Il faut que tu viennes.* 「君は来なくてははいけない」は, 単に *Oportet uenias.* でよい。

d) 比較級

Paulus fortior est Petro.

Paul est plus courageux que Pierre. パウルスはペトルスよりも勇敢だ。

一般にフランス語の比較、最上級は、分析的、迂言的に、例えば *plus stupide* 「より愚かな」 *le plus stupide* 「最も愚かな」というのに対し、ラテン語では、*stultior*, *stultissimus* と形容詞の語尾を変化させて一語で表現する。副詞についても同様。また比較の対象は、しばしば単に名詞の奪格形のみで示される。

e) 助動詞

Emi uirginem triginta minis.

J'ai acheté la jeune fille trente mines. 私は娘を30ミーンで買った。

フランス語の、例えば複合過去に見られるような、助動詞+過去分詞の迂言的完了形は古典ラテン語ではまだ生じていない。また未来時称は、英語やドイツ語が助動詞を用いて迂言的に表現するのに対し、フランス語やイタリア語は、ラテン語の伝統をいまだに受けついでこれを単に動詞の変化語尾で示す。もっとも、その未来形はラテン語本来の未来形に由来するものではなく、不定詞+ *avoir* (*avere*) の直説法現在、の形から生じたものではあるが。

f) 受動態

Ibi L. Cotta pugnans interficitur cum maxima parte militum. (Caesar : De Bello Gallico, V-37)

Lucius Cotta, tout en combattant là, est tué avec la plupart des soldats.
ルーキウス・コックは、そこで闘いながら、多くの兵士と共に殺される。(カエサル『ガリア戦記』)

これも助動詞の節約に関連したことだが、フランス語の受動態が、助動詞

être + 過去分詞, の形をとるのに対し, ラテン語はこれも単に語尾変化で表わす。ただし, 完了相は, *esse* + 完了分詞の迂言的受動態となる。Amor a Deo. *Je suis aimé de Dieu*. 「私は神に愛されている」。Amatus sum a Deo. *J'ai été aimé de Dieu*. 「私は神に愛された」。

上記カエサルからの引用文の人名, L.Cotta について一言。ラテン語の文章では, 名前(個人名) *praenomen* は普通省略記号でしるされる。例えば, Marcus なら M., Publius は P., Quintus は Q. という風に。名前の数が限られていたためでもあるが, これもラテン的簡略法の一例であろうか。もちろん音読する場合は, マールクス, プーブリウス等, 省略しないで読んだ。

g) 接続詞

Audiuimus Caesarem Roma profectum esse.

Nous avons appris que César est parti de Rome. 我々はカエサルがローマから発ったことを知った。

語と語を介在物なしに直接並置することの多いラテン語は, 近代西欧語に比べ接続詞の使用においてもはるかに節約的である。引用は, ラテン文でしばしば用いられる不定法句であるが, これを仏訳するには接続詞 *que* を入れざるを得ないだろう。*Que le ciel nous protège*. 「天が我等を守護せんことを」といった風に, *que* + 接続法による願望, 命令の表現形式がフランス語にあるが, ラテン語では接続法のみですます。*Qu'il parte*. 「彼が出発せんことを」は Abeat. あるいはまた, *Que tu veuilles ou ne veuilles pas*. 「あなたが望もうと望まいと」はわずかに二語で, Velis nolis.

以上, ごく簡単にラテン語的簡潔法的一端にふれた。もちろんこれ以外にも, 関係代名詞の先行詞の省略, 様々の分詞による凝縮表現など, 言及すべき点は多々あるであろうが, 本稿の眼目はそこにはないので, とりあえずこれ位に

しておきたい。さてそこで、ヴァレリーの言う「前置詞の使い惜しみ」*La langue latine est avare de prépositions*である。以下は問題をこの一点にしぼり、いささか文例をひろってみたい。

II

ラテン語とフランス語とを比較した場合、最も大きな相違点は、格 *casus*, *cas* の有無であろう。前者が文中の語（名詞、形容詞、代名詞、分詞など）と語の関係を、基本的に変化語尾による格で表わすのに対し、後者はこれを語順と前置詞をもってする。格を持つ時、語の文法的機能はすでに変化語尾で明示されているから、それぞれの語は独立的で、文中の語の位置は自由である。*Petrus Italiam amat*. 「ペトルスはイタリアが好きだ」では、*Petrus* が主格、*Italiam* が対格なのは明瞭故、語順を替えて、*Italiam Petrus amat*. と言っても、*Amat Italiam Petrus*. と言っても基本的に意味は変わらず、文は成立する。つまり、この3語をどのように語順を入れ替えてもかまわない。対してフランス語の *Pierre aime l'Italie*. 「ピエールはイタリアが好きだ」は、*L'Italie aime Pierre*. とすれば意味は全く異なり、*Aime Pierre l'Italie*. とは普通言えない。つまり、語順は固定的である。

しかし、語と語の関係は、ほとんど無限と言ってよいほど多様でありうる。すべてこれを格で表わすことは不可能である。当然ながら、ラテン語にもまた前置詞が必要とされるわけだ。が、基本はあくまでも格なのであり、前置詞は、格では十全に表現しきれないところを、格の曖昧模糊たるところを補う、いわば補助的役割を担っていると言えるだろう。以下、ラテン語の6格、すなわち主格、呼格、属格、与格、対格、奪格の各々において、フランス語との比較の上で、如何に前置詞が節せられているか見ていきたい。このうち、主格 *Nominatiuus* と呼語 *Vocatiuus* については、ラテン語とそれに対応するフランス語の両者において、共に前置詞とは無関係である。

1. 属格 Genitiuus

属格は、所有、属性、部分などを表わすが、ラテン語で属格単独で示すところを、フランス語では一般に前置詞 *de* を介在させた、分析的、迂言的表現法をとる。その主な用法をあげてみよう。

(1) 所有の属格

名詞の補語 *complément* となる、所有、所属を示す属格 *gen. possessiuus* は、最も一般的な用法であり、ページのどこを開いても、たちどころにそのいくつかを見出せよう。試みに『ガリア戦記』第6巻の冒頭に眼をおとせば

Maiorem Galliae motum Un plus grand soulèvement de la Gaule
ガリアのより大きな反乱

Opinionem Galliae L'opinion de la Gaule ガリアの世論

Italiae facultates Les ressources de L'Italie イタリアの力

Earum cohortium numero Le nombre des cohortes そのコホルス隊の数

Populi romani disciplina atque opes L'organisation et les ressources du peuple romain ローマ人民の組織力と実力

という風に、いくつも所有の属語がある。さらに少し進むと、*Concilium Luteciam (Lutetiam) Parisiorum transfert.*⁽⁴⁾ *Il transporte l'assemblée à Lutece, ville des Parisii.* 「彼は(ガリアの)会議をパリーシー族のルテキアに移す」とあり、ローマ時代の *Lutetia* が今日 *Paris* と呼ばれるのは、そこがパリーシー族の町であったからだとわかるのである。

Amor Dei L'amour de Dieu 神の(への)愛

Metus hostium La crainte des ennemies 敵の(への)恐れ

神の我々への愛なのか、我々の神への愛なのか、敵が恐れているのか、それとも、敵を恐れているのか——主語的属格 *gen. subiectiuus* と目的語的属格

gen. obiectiuus の区別に、内外のどの文法書も言及しているが、少々こうるさく感じられなくもない。意はおのずから文脈によって決せられるであろう。目的語となる属格の代りに、前置詞の助けをかりて、in+対格 とすれば、たしかに誤解の余地はなくなるだろう。しかし、明瞭化されたために、かえってまた失われるものもあるのだ。例えば *amor fati*, *l'amour du destin* 「運命愛」を *amor in fatum* とすれば、はっきり「運命に対する愛」ということになるが、*amor in fatum* と *amor fati* は違う。余韻が違う、含蓄が違うのである。

所有の属格はまた、仏文法でいう属詞 *attribut* としても用いられる。*domus patris*, *la maison de mon père* 「父の家」は次のように展開できる。

Haec domus patris mei est. Cette maison est de mon père. この家は私の父のだ。

属詞となる属格の仏訳は、単に前置詞 *de* ですませるのではなく、*appartenir à* ～, *être à* ～, *être le rôle (le propre, le devoir) de* ～などとパラフレーズした方がわかり易いであろう⁽⁵⁾。単に属格のみによる場合に比べ、言葉の力は格段にうすらぐのであるが、

Liber est Petri. Le livre appartient à Pierre. その本はペトルスのだ。

Est regis imperare. C'est le propre du roi de commander. 命じるのが王の役目である。

Est uiri fortis ne suppliciis quidem moueri. (Cicero : Pro Milone, 82)⁽⁶⁾ *C'est le fait d'un homme courageux de ne pas se laisser ébranler même par les supplices.* 拷問によっても心を動かされないのが、勇者にふさわしいことである。(『ミローン弁護』)

名詞の属格形だけでなく、ラテン語に特有の動名詞 *Gerundium* の属格もま

た、補語の役割を果たす。仏訳の場合は *de* + 不定詞、になる。

Sapientia ars uiuendi est. La sagesse, c'est l'art de vivre. 知恵は生活の技術である。

動名詞はまた時に、動形容詞 *Gerundium* によってとって代られる。すなわち *tempus legendi historiam, le moment de lire l'histoire* 「物語を読む時間」は、まったく同意で、

Tempus legendae historiae.

テムプス レゲンダアエ ヒストリアエ。余談ながら、私には属格形にしばしば表われる、このアエ、アエという、ゆったりと甘やかな二重母音の連なりが、限りなく美しくやさしく耳にひびく。もちろん音読することなどないのであるが、黙読においてもまた、我々はみな音を聞きながら読んでいるのである。これは日本語でも、外国語でも、ラテン語のような過去の言語でも変わらない。語のひびきの快、不快を敏感に感じながら、耳もまた読書に参加しているのである。ラテン語の、やや固く、厳しく、いささか重くうるしもある音の連なりの中にあって、時に出会うアエ、アエの優美なひびきは、なかなか魅惑的である。

Vim uerae amicitiae La valeur de la vraie amitié 真の友情の価値

Satis eloquentiae, sapientiae parum. Assez d'éloquence, trop peu de sagesse. 雄弁なれども知恵に乏し。

後者は後にふれる部分を示す属格である。

(2)性質の属格

人間や事物の特質、属性などを示すのが性質の属格 *gen. qualitatis* である。これも『ガリア戦記』の第2巻から例をひろってみると、

Homines magnae uirtutis Des hommes d'un grand courage たいへん勇敢な者たち

Magni ponderis saxa *Des pierres d'un grand poids* とても重い岩

Fossa duodeuiginti pedum *Un fossé de dix-huit pieds* 18歩尺の壕

属性はまた、しばしば奪格形によっても表現される。*un enfant d'un excellent naturel*「秀れた素質を持つ子供」は、属格を用いて *puer egregiae indolis*でもよいし、奪格を使って *puer egregia indole*でもよい。前者が本質的、永久的属性を表わすのに対し、後者は一時的、随伴的なものを示す、と一応分けられているが、必ずしもいつもそうでもないようだ。共に性質を表現することにおいて変りはないが、奪格の鋭く断定的なのに対し、属格により穏やかでエレガントな印象を抱くのは、単に筆者のみではないと思うが。属格におくか、それとも奪格かは、多分に著者の好みもあったようだ。例えば、ローマ随一の史家、『ゲルマーニア』*Germania*のタキトゥス Tacitus は好んで奪格形を用いたらしい⁽⁷⁾。さもありなん、とも思えるが。キケローに面白い例がある⁽⁸⁾。

Vir magni ingenii summaque prudentia, Un homme de grand talent et de la plus haute sagesse, 大きな才能と最高の知恵を備えた男

性質の属格 *magni ingenii*と同じく奪格 *summa prudentia* が同一文中に、等位接続詞である前接辞 *que*でもって並列されているのだ。

性質を示す属格は、主語の属詞 *attribut*としても用いられる。

Res erat multae operae ac laboris. (De Bello Gallico, V- II) *L'affaire demandait beaucoup de peine et de travail.* 仕事はたいへん困難で骨の折れるものだった。(『ガリア戦記』)

ローマ建国伝説を歌った、ウェルギリウスの人口に膾炙した一句。

Tantae molis erat Romanam condere gentem. (Aeneis : I ~ 33)
Tant c'était pénible effort, que fonder la nation romaine. ローマの国を建てることは、かほどにも困難な業であった。(『アエネーイス』)

いわゆる評価の属格 *gen. pretii* も性質の属格の一つに数えられよう。

Haec noli putare parui (Catullus)⁽⁹⁾. *Ne considère pas cela comme peu d'importance.* これを値打のないものと思うな。

Voluptatem uirtus minimi facit (Cicero)⁽¹⁰⁾. *La vertu ne fait pas le moindre cas de plaisir.* 徳は快樂をいささかも価値あるものとは見なさない。

(3)部分の属格

全体の中の一部と表わすのが、部分の属格 *gen. partituius*. フランス語では、もちろんこれも前置詞 *de* 等を用いて分析的に示さざるを得ない。 *magna pars Italiae, la plupart de l'Italie* 「イタリアの大部分」, *reliquum vitae, le reste de la vie*, 「人生の残り」。まずカエサルから、

Partem copiarum ex prouincia in Heluios conuenire iubet. (De Bello Gallico, VII-7)⁽¹¹⁾ *Il ordonne qu'une partie des troupes de la province se concentre chez les Helviens.* 彼はプロウィーンキアからの部隊の一部がヘルウィー族の所に集まるように命じた。(『ガリア戦記』)

Horum omnium fortissimi sunt Belgae. (ibid., I-1) *De tous ces peuples les plus braves sont les Belges.* これら全ての中で最も強いのはベルガエ人である。(同上)

部分属格は、単に名詞の補語となるだけでなく、形容詞、副詞、代名詞等の補語にもなる。

Satis uini *Assez de vin* 十分なるワイン

Quis uestrum? *Qui d'entre vous?* 君たちのうちの誰が。

Quid noui? *Quoi de nouveau?* 何か新しいことは。

Vbi terrarum? *En quel point de la terre?* いったいどこに。

Nemo nostrum *Personne parmi nous* 我々の中の誰も

いくつかの例をあげてみたが、仏訳と比べてみるとよくわかるだろうが、いか

にもラテン語らしい、かっちりと凝縮された表現法が魅力的だ。しかし、時代が下ると、部分属格は次第に前置詞の攻勢を受け始め、より分析的で明瞭な言いまわしにとって代られる。例えば *unus multorum* 「多くの中の一人」は、前置詞+奪格の *unus e multis* ないしは *unus de multis* という具合に分解され、やがてフランス語では *un parmi beaucoup* となる。

(4) 属格をとる形容詞

充満、関与、経験、欲求などを意味する形容詞は補語に属格を要求する。フランス語では、*de* をはじめ、*à*, *pour* 等前置詞を介して補語をとる。

Plenus auri *Plein d'or* 金でいっぱい

Peritus belli *Habile à la guerre* 戦いに巧みな

Auidus gloriae *Avide de gloire* 栄誉に飢えた

Studiosus ueritatis *Zélé pour la vérité* 真実の追求に熱心な

キケローから二例引いておきたい。

Ferae sunt rationis et orationis expertes.⁽¹²⁾ (*De officiis*, I ~50) *Les bêtes sont privées de raison et de parole.* 動物には理性も言葉も欠けている。(『義務について』)

Graeculos homines contentionis cupidiores quam ueritatis. (*De oratore*, I ~47) *Ces pauvres Grecs, plus amoureux de la discussion que de la vérité.* 真実よりも論争を愛するあわれなギリシャ人たち(『弁論家について』)

充満、またはその反対の欠乏を表わす形容詞は、奪格をもとり得る。*plenus irae*, *plein de colère* 「怒りでいっぱい」は、*plenus ira* でもよい。だが、属格の方がここでもより穏やかな印象を与えるであろう。

若干の動詞は属格を要求し、さらに以上4点にわたって述べたほかにも、いろいろ用法はあるが、煩雑を避けて、ひとまずこれ位にしておきたい。

2. 与格 Dativus

与格は動詞や形容詞の補語となり、付与 *attribution*, 利害関係を中心に多様な意味を示す。前置詞を伴うことのないラテン語の与格は、フランス語に直すと、前置詞 *à, pour* 等を介した分析的、迂言的表現をとる。

(1) 動詞の目的補語

与格は直接他動詞の間接目的補語 *complément d'objet indirect* となる。初学者が一度はお目にかかる文例をもってすれば、

Rosam puellae do. *Je donne une rose à la fille,* 私は少女にバラを
与へる。

次の『ガリア戦記』では、動詞 *inferre* の直接目的補語が対格 *bellum*, 間接目的補語が与格 *finitimis*。

His rebus fiebat ut et minus late uagarentur et minus facile finitimis bellum inferre possent. (De Bello Gallico, I ~ 2) *Cela restreignait le champ de leurs courses vagabondes et les gênait pour porter la guerre chez leurs voisins.* このために彼等の行動範囲はせまくなり、近隣の者と戦うにも容易ではなかった。(『ガリア戦記』)

与格はまた、利害、感情、態度などを意味する数多くの動詞の目的補語となる。これらの多くは、仏訳では間接他動詞(自動詞)となり前置詞を要求する。*cauere, prendre garde à* ~ 「用心する」, *irasci, s'irriter contre* ~ 「怒る」, *nocere, nuire à* ~ 「害する」, *parere, obéir à* ~ 「従う」 etc. また一部は直接他動詞となり前置詞を要しない。*fauere, favoriser* 「優遇する」, *inuidere, envier* 「うらやむ」 etc.

Quare, patres conscripti, consulite uobis ; prospicite patriae. (In Catilinam, IV - 3) *Ainsi pères conscrits, prenez soin de vous-mêmes ; pensez à l'avenir de la patrie.* それゆえ元老院議員諸君、君達自身を気づ

かいたまえ、祖国の将来を思いたまえ。（『カティリーナ弾劾』）

Homines plurimum hominibus et prosunt et obsunt. (De officiis, II -17) *Les hommes, à la fois, profitent et nuisent le plus aux hommes.* 人間が同時に最も人間に役立ちもすれば、害を与えもする。（『義務について』）

与格を要求する動詞に関し、キケローの二文を引用した。またキケローか、と思われる向きもあるかもしれないが、またしてもキケロー、キケローなのである。すでに半世紀以上にわたり、あまたのラティニストの座右の友でありつづけている、Gaffiotの『羅仏辞典』を初めてひもといてみた折の驚きを忘れない。優に半数をこえる引用文が、キケローのものなのだ。およそ他のもろもろの言語において、一人の作家が辞書の半ば以上を（カエサルを合せれば3分の2）独占するなどということがあり得るだろうか。それまで漠然と、折衷派の雄弁家、といった程度の認識しかなかったのであるが、あらためてキケローの大いに目を開かれた次第である。古典ラテン語とは、つまりキケローのラテン語にほかならない。

(2)与格をとる形容詞

与格を目的補語とする動詞とほぼ同義の、利害、好悪、信・不信、親近、類似などを表わす形容詞は与格を要求する。amicus, *ami de (avec)* ～「親しい」、fidus, *fidèle à* ～「忠実な」、proximus, *très près de* ～「大変近い」、similis, *semblable à* ～「類似の」etc.

Segnitia est pueris pernicioosa. *La paresse est pernicieuse pour les enfants.* 怠惰は子供にとって有害である。

Sic canibus catulos similis, sic matribus haedos. (Vergilius : Eclogae, I ~22) *Ainsi les chiots semblables aux chiennes, les chevreaux à leurs mères.* 子犬が親犬に、子山羊が母山羊に似ているように（ウェルギリ

ウス『牧歌』)

Flamma fumo est proxima. *La flamme est très proche de la fumée.*
火は煙に大変近い。

最後の文例は、紀元前三世紀の喜劇作家プラウトゥス Plautus のものだが、⁽¹³⁾「火のない所に煙はたたぬ」*Pas de fumée sans feu* ということだろう。ドイツ語の言いまわしに簡明である。*Erst Rauch, dann Feuer.*

(3)利害の与格

意味論的にいって最も与格らしい用法は、いわゆる利害関係の与格 *dat*, *commodi aut incommodi* であろう。フランス語では、前置詞 *pour* を用いるのが普通。

Lupus est homo homini. *L'homme est un loup pour l'homme.*
人間は人間にとって狼である。

O Meliboe, deus nobis haec otia fecit. (Eclogae, I – 6) *O Melibée, le dieu a fait ces loisirs pour nous.* ああメリボエウス、神が我々にこの閑暇を恵まれたのだ。(『牧歌』)

Quid huic homini facias? *Que peux-tu faire à l'égard d'un tel homme?* このような男をいっただうしようというんだ。

与格には、好悪、親疎その他何にせよ感情的色彩が色濃く反映されているように思える。上記文例の、*huic homini* 「こんな男に」という思い入れのこもった表現力に富む与格は、仏訳のように前置詞を介して分析的に示されると意味はより明瞭になるが、その分文の密度が薄まるのはいたし方なからう。ことわざに、*Fortuna fauet fortibus. La fortune sourit aux audacieux.* 「運は大胆なる者に微笑む」というのがあるが、これと同じことを *fortis* を対格にして *Fortes fortuna iuuat.* とも言うが、与格におかれた方が *fortis* 「大胆なる者」の存在がより身近なものに感じられはしないであろうか。

所有の与格 *dat. possessoris* についても、同じようなことが言えよう。Est mihi liber. は一応 *J'ai un livre*. 「私は本を持っている」と訳し得る。だが「私のだよ」とでもいった与格 *mihi* にこもった感情的ニュアンスは、どうしても失われる。一寸と変な訳だが、*Il y a un livre pour moi*. とでもするか。

Amplissimae tibi hortunae sunt (Cicero).⁽¹⁴⁾ *A vous très riche fortune*. あなたには大変豊かな財産がある。

In muro consistendi potestas erat nulli. (De Bello Gallico, II~6)
Personne ne pouvait rester au rempart. 誰も防壁の上にとどまっていることはできなかった。(『ガリア戦記』)

感情的な関わりを表わす関心の与格 *dat. ethicus* においても、与格のもつ表現力的一端がよくうかがえるだろう。Quo mihi abis? *Où vas-tu?* 「どこにあなたは行くのか」。私の関心を示す与格 *mihi* は、一寸と訳しようがない。

(4)二重与格

利害の与格が, *esse, être* 「～である」, *mittere, envoyer*, 「送る」, *dare, donner* 「与える」等の動詞と共に目的の与格 *dat. finalis* と組み合わせられると、与格を二つとるラテン語独特の凝縮された二重与格構文ができる。*dare librum alicui dono, donner un livre à quelqu'un pour un cadeau (comme un cadeau)* 「誰々におくり物として本を与へる」のたぐいである。

Senatus copias auxilio imperatori misit. Le sénat envoya au général des troupes en renfort. 元老院は將軍に援軍として部隊を送った。

Quinque cohortes castris praesidio reliquit. (De Bello Gallico, VII-60)⁽¹⁵⁾ *Il laisse pour la garde du camp cinq cohortes.* 彼は5個のコルホス隊を陣地の守備のために残す。(『ガリア戦記』)

Ea res magno usui rei publicae fuit. (Cicero)⁽¹⁶⁾ *Cela a été fort utile à l'Etat.* それは国家にとって大いに有益だった。

3. 対格Accusatiuus

前置詞の節約という観点からは、対格に関してさほど述べることはない。二重対格構文、時空の広がりを示す対格、行き先を表す対格など数点にとどまる。

(1)二重対格

他動詞の直接目的補語は、ラテン語でもフランス語でも前置詞を必要としなが、docere, *enseigner*「教える」, rogare, *demande*「求める」などの動詞と共に見られる二つの対格を持つ二重対格構文は一瞥に価するだろう。

Ea quae scimus alios docere possumus. (Cicero : De natura deorum, II - 148)⁽¹⁷⁾ *Nous pouvons enseigner aux autres ce que nous savons.* 我々は知っていることを他人に教えることができる。(『神々の性質について』)

Interim cotidie Caesar Haeduos frumentum, quod essent publice polliciti, flagitare. (De Bello Gallico, I - 16) *Cependant César réclamait chaque jour aux Héduens le blé qu'ils lui avaient officiellement promis.* しかしながら、日々カエサルは、ハエドゥイー族が公けに約束した穀物を要求した。(『ガリア戦記』)

キケローの文では ea と alios, カエカルでは frumentum と Haeduos と、それぞれ事物と人が対格におかれているが、仏訳の場合は、後者に前置詞を用いて *aux autres, aux Héduens* とせざるを得ない。

(2)広がり対格

Tres annos regnauit. *Il a régné pendant trois ans.* 「彼は三年間君臨した」といった風に、時間的もしくは空間的延長を裸の対格で表わす、広がり対格 acc. spatii という用法がある。前置詞 per を用いて per tres annos と

延長期間をよりはっきりさせることもできる。また逆に、フランス語の *pendant* を略すこともできる。

Duodequadrageinta annos tyrannus Syracusanorum fuit Dionysius.
(Cicero : Disputationes Tusculanae, V-57) *Trente-huit années durant, Denys fut tyran de Syracuse.* 38年の間、ディオニーシウスはシラークーサエの専制君主だった。(『トゥスクルム談論』)

Totam hiemem ipse ad exercitum manere decreuit. (De Bello Gallico, V-53) *Il décida à rester lui-même à l'armée pendant tout l'hiver.* 彼は自ら冬の間ずっと部隊に留まることにした。(『ガリア戦記』)

空間の広がり の例を一つ。

Turres quae pedes octoginta inter se distarent.⁽¹⁸⁾ (De Bello Gallico, VII-72) *Des tours distantes les unes des autres de quatre-vingts pieds.* それぞれ80歩尺の間隔を持った塔。(『ガリア戦記』)

(3) 方向の対格

Quo uadis? Où vas-tu? 「どこに行くのか」の問に対しては、Eo in Galliam. *Je vais à la Gaule.* 「ガリアに行くのだ」、Eo ad amicum. *Je vais chez mon ami.* 「友達の所に行くのです」といった具合に、前置詞+対格で答えるのが普通である。もっとも詩はこの限りではないが。しかし都市名 (Roma, Napolis etc.) 小島名 (Delos, Salamis etc.) それに「家」「田舎」の domus, rus は対格単独で方向を示す。故に「パリ (ルテティア) へ」*à Paris* は単に Lutetiam, 「田舎へ」*à la campagne* は rus。

キケローから一文。簡素堅固で、密度の濃い、ラテン的名文の一つと思うのだが。

Quod cum audiuisset adulescens filius, negotium exhiberi patri, accurrisset Romam et cum primo luci Pomponii domum uenisse dicitur.

(De officiis, III～112) *Or, quand le fils, un jeune homme, eut appris l'ennui qu'on suscitait à son père, il accourut, dit-on, à Rome, et, avec le point du jour, arriva à la demeure de Pompenius.*

ところで息子である若者は、父親に面倒が生じたと知るや、ローマにかけつけ、夜明けとともにポンペーニウス之家に到着したという話だ。(『義務について』)

4. 奪格Ablatiuus

起源、原因、手段、様態、時間、場所等々さまざまな状況補語となる奪格の用法は、なかなか複雑である。ラテン語の奪格は、インド・ヨーロッパ祖語の本来の奪格、すなわち出発点、分離、起源などを示す「分離の奪格」abl. separatiuusに、具格に由来する「手段、随伴の奪格」abl. instrumentalis et comitatiuusと、地格からの「場所、時間の奪格」abl. localis et temporalisが融合合体したものである。ラテン語に特有の奪格はまた、これを持たないギリシャ語(属格と与格が奪格の機能を分け持った)に対比して、しばしば「ラテン格」casus latinusと呼ばれた。複雑多彩な奪格の用法を、単に格形のみで表現することは不可能故、早くから、a (ab), de, e (ex), cum, in, sub等の前置詞を伴って用いられた。とはいえ、より古層に属する裸の奪格形も多くのケースに見うけられるのであり、筆者の興味も一にかかってこの点にある。如何に奪格が多用されるかを示す。愉快的な文例がある。

Ferris magna celeritate cum magistro sole oriente in campo pedibus nudis currunt pueri.⁽¹⁹⁾ *Pendant les vacances, avec leur maître, les enfants courent très vite, pieds nus, dans la plaine, au soleil levant.* 休暇の間、先生とともに子供たちは、日の出る頃、野原を素足で全速力で駆ける。裸の奪語で4個所、前置詞つきで2個所と、主語と動詞を除き、他はすべて奪格形である。奪格の意を正確につかむことがラテン語解読の鍵である、といわ

れるのもうべなるかなである。

(1)本来の奪格

a) 出発点や起源を示すには、前置詞 a (ab), de, e (ex) をつけるのが普通（詩はこの限りではないが）。Accepi litteras a patre. *J'ai reçu une lettre de mon père*. 「私は父から手紙を受取った」。ab oppido venire, *venir de la ville* 「町から来る」, ex montibus decurrere, *descendre en courant des montagnes* 「山から駆け下る」。

しかし、都市名、小島名、domus, rus は「～から」を裸の奪格で示す。

Tempestas sedatur, Dollabella Delo proficiscitur. (Cicero : In Verrem actio secunda, I ~46) *Le temps s'apaise, Dollabella part de Délos*. 天候がおさまり、ドラベーラはデーロス島から出発する（『ウェッレス弾劾』）

Erant omnio itinera duo, quibus itineribus domo exire possent. (De Bello Gallico, I - 6) *Il y avait en tout deux routes par lesquelles ils puissent sortir du pays*. 国から外に出ることのできる道は全部で二つしかなかった。（『ガリア戦記』）

後者の文例中 quibus itineribus は、経由を示す手段の奪格。

由来、出身には三様の言い方があるのが面白い。まず家系には奪格単独。nobili genere natus, *né d'une noble famille* 「貴族の生まれ」。親には奪格単独もしくは e (ex) + 奪格。Iove (e Vulcano) natus, *né de Jupiter (Vulcain)* 「ユピテル（ウルカヌス）から生れた」。祖先を示すには a (ab) + 奪格。a Catone ortus, *descendant de Caton* 「カトーの血を引く」。

b) 奪格は分離、剥奪、欠乏などを意味する動詞と共に用いられる。arcere, *écarter de* ～ 「遠ざける」, excludere, *exclure de* ～ 「排除する」, liberare,

délivrer de ～「解放する」, *orbare*, *priver de* ～「奪う」, *vacare*, *être exempt de* ～「欠く」 etc. また、同意の形容詞 *liber*, *libre de* ～「自由な」, *nudus*, *dépouillé de* ～「裸の」, *orbus*, *privé de* ～「欠けた」 etc. も奪格の補語をとる。共に奪格単独で用いるのが本来のあり方とはいえ、前置詞を伴う場合も数多い。

Magno me metu liberabis, modo inter me atque te murus intersit.
(*In Catilinam*, I ～10) *Tu me délivreras d'une grande crainte, du moment qu'un mur sera entre toi et moi.* 君と私との間に壁ができれば、君は大きな不安から私を解放してくれるだろう。(『カティリーナ弾劾』)

Quid facerem? Neque seruitio me exire licebat, nec tam praesentis alibi cognoscere diuos. (*Eclogae*, I - 40, 41) *Qu'aurais-je fait?*
Je ne pouvais ni sortir autrement d'esclavage, ni connaître ailleurs des dieux si bienveillants. どうすればよかったのだ。奴隷の身分からぬけ出すことも、またほかではこれほど恵み深い神々を見つけることもできなかったのだから。(『牧歌』)

前者の動詞 *liberare* は、事物からの解放の場合はこのように奪格単独で、人からの場合は *a* (*ab*) と共に用いられる。*liberare patriam a tyranno*, *délivrer sa patrie d'un tyran* 「祖国を僭主から解放する」。

(2) 手段、随伴の奪格

a) 手段、道具の表現には単独の奪格を用いる。

Nunc uino pellite curas. *Maintenant chassez vos soucis par le vin.*
今や酒にて憂を追へ。

Dente lupus, cornu taurus petit. *Le loup attaque avec la dent, le taureau avec la corne.* 狼は牙で、牛は角で襲う。

ラテン語をはじめた当初、筆者がことに強くひきつけられたのは、この手段を

示す裸の奪格形だった。*avec, de, par, au moyen de*などといった前置詞ないしは前置詞句を用いた、まだるっこしい表現法をとるのではなく、*uino, dente, cornu*と短く鋭く一語で手段を示す奪格形は、強く胸にひびくような一種の重量感を持っているように思えた。小気味がよい、といってもいいような感じをしばしば覚えた。

Interiores plerique frumenta non serunt, sed lacte et carne uiuunt pelibusque sunt uestiti. (De Bello Gallico, V-14) *Les habitants de l'intérieur, en général, ne sèment pas de blé ; ils vivent de lait et de viande, et sont vêtus de peaux.* 内陸部の住人は一般に穀物を蒔くことはなく、乳と肉で暮らし、獣皮を着ている。(『ガリア戦記』)

手段の奪格の一つに原因、理由の奪格 *ab. causae* があるが、これも単独で用いる。

Vi uicta uis, uel potius oppressa uirtute audacia est. (Pro Milone, 30) *La violence a été vaincue par la violence, ou plutôt l'audace a été écrasée par le courage.* 力によって暴力は破れ、勇気によって無謀は屈服させられた。(『ミローン弁護』)

肺腑をえぐるかのような、キケローの雄弁の一端がうかがえるが、これも裸の奪格形 *ui, uirtute* があってこそなのだろう。これを入れて、5回くり返される *u* 音の頭韻が耳に快い。

「いかなる点において」という観点を示す、限定の奪格 *abl. limitanionis*。これも手段の奪格の一つ。

Fuit antea tempus cum Germanos Galli uirtute superarent. (De Bello Gallico, VI-24) *Il fut un temps où les Gaulois surpassaient les Germains en bravoure.* かつてガリア人がゲルマーニー人に武勇においてまさっていた時代があった。(『ガリア戦記』)

Seruus est, sed fortasse liber animo. (Seneca : Epistulae Morales, V – 47) *Il est esclave, mais il est peut-être libre sous le rapport de l'âme.* 彼は奴隷である, がおそらく精神の点では自由であろう。(セネカ『道徳書簡集』)

Sunt enim quidam homines non re sed nomine. (De officiis, I – 105) *Car il y a des gens qui sont hommes, non pas en réalité, mais seulement de nom.* というのも実際にではなく, 単に名前の上だけで人間といわれる者たちもいる。(『義務について』)

最後の文例には「物, 事, 行為, 状況, 国家(公けの, という形容詞をつける *res publica* ともいう)」等々実に多用な意を含む *res* の奪格形 *re* がみられる。先にふれた *uis* (奪格 *ui*) やこの *res*, さらに *fas* 「天意, 天命」, *ius* 「法」, *mos* 「慣習」, *ops* 「力」, *ira* 「怒り」など, ごく短く, しかも重い意味を担ったいくつかの名詞がある。こうした語は, ラテン語の中でもおそらく最も古層に属するものであろう。何か一寸と酷薄な, と言ってもよいような印象を与えるこれら短く鋭い語は, 古代ローマの言葉に一種特別の力を, 神秘的な力を付与しているようにも思える。

手段の奪格は, 数多くの動詞や形容詞の補語となる。 *complere, remplir de* ～「満たす」, *gaudere, se réjouir de* ～「喜ぶ」, *nitenti, s'appuyer sur* ～「よりかかる」, *uti, se servir de* ～「使う」; *dignus, digne de* ～「価値する」, *laetus, content de* ～「うれしい」 etc.

Petro usus est doctore. Il a eu Pierre comme maître. 彼はペトルスを師とした。

Nitor hasta (in hastam). Je m'appuie sur une lance. 私は槍によりかかる。

Fruenda sapientia est. Il faut jouir de la sagesse. 知を享受しなければ

ならない。

以上、何点かにわたり、手段の奪格を概観してきたが、時代が下るにつれて、裸の奪格形は次第に、ab+奪格、ad+対格、cum+奪格、de+奪格、in+奪格、per+対格、など前置詞を用いた分析的、迂言的表現に傾いていった。

b) 「～と共に」と随伴を示すには、一般に前置詞 cumを用いる。Cum amico cenabam. *Je dînais avec un ami.* 「私は友人と夕食をとった」。しかし比喩的な随伴、様態、性質などを表わすには奪格単独による場合も多い。

Si quid obtigerit, aequo animo paratoque moriar. (In Catilinam, IV -3) *S'il devait arriver quelque chose, je mourrais avec une âme égale et préparée.* もし何事かが起これば、私は従容として死につこう。(『カティリーナ弾劾』)

Cecidisse ex equo dicitur et homo infirma ualeitudine latus offendisse uehementer et, postea quam ad urbem cum fiebri uenerit, paucis diebus esse mortuus. (Cicero : Pro Cluentio, 175) *On dit qu'il fit une chute de cheval ; cet homme d'une faible santé reçut au côté une violente contusion et étant arrivé avec la fièvre aux abords de la ville il mourut peu de jours après.* 彼は落馬したと言われている。健康にすぐれないこの男は、脇腹をしたたか打ち、発熱して町近くまで着いたが、数日後に亡くなった。(『クルエンティウス弁護』)

比較の奪格 abl. comparisonisは、随伴の奪格のヴァリエーションと考えられるが、分離の奪格に由来するという見方もある。これもキケローから二例。

Ex eius lingua melle dulcior fluebat oratio. (De senectute, 31) *De ses lèvres coulaient des paroles plus douces que le miel.* 彼の口からは

蜜よりも甘い言葉が流れ出た。（『老年について』）

Luce sunt clariora nobis tua consilia omnia. (In Catilinam, I – 6)
Tous tes projets sont à nos yeux plus claires que le jour. 君のあらゆる策
 謀は我々の眼には日光よりも明らかだ。（『カティリーナ弾劾』）

*plus~que~*などともってまわった言いまわしをとらず、「蜜よりも甘い」
 を *melle dulcior*, 「日光よりも明瞭な」を *luce clariora* と、それぞれ二語で
 片づけてしまうのは、いかにも颯爽としているではないか。

比較の奪格は、慣用的表現にあっては、時に一語で優に一従属節に値する。

Diuitiae maior opinione. *Une richesse plus grande qu'on ne pensait.*
 想像されていた以上の富。

Victoria maior spe. *Une victoire plus grande qu'on ne l'espérait.* 期待
 されていた以上の勝利。

(3)場所、時間の奪格

a) 場所

位置を示すには、通常 *in* + 奪格。 *Ambulat in horto.* *Il se promène dans le jardin.* 「彼は庭の中を散歩する」。しかし、 *Natus est Carthagine.* *Il est né à Carthage.* 「彼はカルタゴで生れた」など都市名、小島名は奪格単独で。 *Romae* 「ローマで」、 *domi* 「家で」、 *ruri* 「田舎で」などわずかに残る地格形は、もちろん前置詞を要しない。また、名詞 *locus* 「場所」、 *pars* 「方面」 etc. 形容詞 *totus* 「全ての」、 *medius* 「中間の」 etc. を含む語はしばしば前置詞なしで地点を示す。

Rhodanus fluit isque non nullis locis uado transitur. (De Bello Gallico, I ~6) *Le Rhône coule, et ce fleuve est guéable en plusieurs endroits.* ロダヌス河が流れている。そしてこの河はいくつかの地点で歩いて渡れる。（『ガリア戦記』）

Medio flumine quaeris aquam.⁽²⁰⁾ *Tu cherches l'eau au milieu de la rivière.* 君は川の真ん中で水を求める。

さらに, *terra marique, sur terre et sur mer* 「陸でも海でも」, *dextra laeuaque, à droite et à gauche* 「右でも左でも」など前接辞 *que* を伴う凝縮された慣用表現にも注目したい。

b) 時間

Quando ueniet? Quand viendra-t-il? 「彼はいつ来るのか」の問に対しては, 奪格のみで, *Ortu solis ueniet. Il viendra au lever de soleil.* 「日の出るころ来るだろう」と答えるのが普通。

Aduentu in Galliam Caesaris. (De Bello Gallico, V-54) *A l'arrivée de César en Gaule.* カエサルのカリア到着時 (『ガリア戦記』)

Primo punico bello Reglus captus (est) a Poenis. (De officiis, I-39) *Dans la première guerre punique, Régulus a été fait prisonnier par les Carthaginois.* 第一次ポエニ戦争の時, レグルスはカルダゴ人に捕らえられた。(『義務について』)

しかし, 前置詞 *in* を伴うこともあり, とりわけ修飾語なしで名詞が用いられる場合に多い。*In bello, en temps de guerre* 「戦時に」, *in senectute, dans la vieillesse* 「老年に」 etc.

(4) 絶対奪格

最後に, ラテン的簡潔の一つの極致とも言える, 絶対(独立)奪格構文 *abl. absolutus* に一瞥を与えなくてはなるまい。このラテン語特有の言いまわしは, 前置詞なしの裸の奪格の名詞または代名詞(主語に相当)と, 同じく裸の奪格の分詞, 形容詞, 名詞(述語に相当)を組合せて作る。時, 理由, 条件, 譲歩等もろもろの従属節に代りうるもので, 一種小気味のよいスピード感を文体に

付与する。

Eo celeriter confecto negotio rursus in hiberna legiones reduxit. (De Bello Gallico, VI-3) *L'affaire fut vivement terminé, après quoi, il fit demi-tour, et ramena les légions dans leurs quartiers.* その仕事を素速やく終えと、彼はふたたび軍団を冬営地に引きもどした。(『ガリア戦記』)

Ista (natura) duce errari nullo pacto potest. (Cicero : De legibus, I ~20) *Avec la nature pour le guide, il n'y a absolument pas moyen de s'égarer.* 自然を案内者とすれば、迷う余地などまったくない。(『法律について』)

この絶対奪格の多用によって、カエカルのキビキビとした行動的文体が生れた、といっても過言ではないと思うが、絶対奪格構文を二つ連続させた次例は、迅速簡潔なラテン的名文の一つだろう。

His traditis omnibusque armis ex oppido conlatis, ab eo loco in fines Ambianorum peruenit. (De Bello Gallico, II ~15) *Quand on les lui eut livrés, et qu'on lui eut remis toutes les armes de la ville, il marcha de là vers le pays des Ambiens.* 彼等(人質)が引渡され、すべての武器が町から集められると、彼はそこからアンビアニ族の領地へ進んだ。(『ガリア戦記』)

注(1) Cicero: In catilinam IV-3

本項を含め以下作品名を記した原文の引用はすべてSociété d'édition 《Les belles lettres》の、通称Budé版による。

(2) 泉井久之助『ラテン広文典』P.16~7, 白水社, 1952

(3) Paul Valéry : Oeuvres I, P207, Pléiade, 1957

(4) Caesar : De Bello Gallico, VI-3

(5) A. Cart, P. Grimal, J. Lemaire, R. Noiville : Grammaire latine, P.121, Nathan, 1955

(6) 引用部分を含む原文。Populi grati est praemiis adficere bene meritos de re publica ci-

uis, uiri fortis ne suppliciiis quidem moueri ut fortiter fecisse paeniteat.

- (7) A. Ernout, F. Thomas : Syntaxe Latine, P.44, Klincksieck, 1951
- (8) ibid.
- (9) ibid., P.53
- (10) ibid.
- (11)partem copiarum ex prouincia supplementumque quod ex Italia adduxerat in Helios, qui fines Aruernorum contingunt, conuenire iubet.
- (12) ; neque ulla re longius absumus a natura ferarum in quibus inesse fortitudinem saepe dicimus—ut in equis, in leonibus—iustitiam, aequitatem, bonitatem non dicimus ; sunt enim rationis et orationis expertes.
- (13) M. Lavency : VSVS, P.167, Duculot, 1985
- (14) G.François : Grammaire latine, P.125, H.Dessain, 1976
- (15) Quinque cohortes, quas minime firmas ad dimicandum esse existimabat, castris praesidio relinquit.
- (16) G. François : Grammaire latine P.127
- (17) この個所の引用のみLoeb版による。
- (18)et turres toto opere circumdedit, quae pedes LXXX inter se distarent.
- (19) J.Gaillard, J. Cousteix : Grammaire essentielle du latin, P.35, Scodel, 1976
- (20) VSVS, P.176

参考書目

- L. Sausy : Grammaire latine complète, F. Lanone, 1962
- J. Gascon, A. Thomas, E. Magnard : Précis de grammaire des lettres latines, Magnard, 1979
- H. Petitmagnin : Grammaire latine, Nathan, 1963
- J. Gaillard, J. Cousteix : Grammaire essentielle du latin, Scodel, 1976
- E. Famerie, A. Bodson, M. Dubuisson : Méthode de langue latine, Nathan, 1989
- G. Serbat : Les structures du latin, Picard, 1986
- P. Bouet, D. Conso, F. Kerlovegan : Initiation au système de la langue latine, Nathan, 1991
- G. Pittàno : Corso di latino, Mondatori, 1992
- R. Alosi, P. Pagliani : Corso di latino, Petrini, 1985
- A. Ghiselli, G. Concialini : Grammatica moderna della lingua latina, Laterza, 1987
- F. M. Wheelock : Wheelock's latin grammar, Harper Perennial, 1992

B. L. Gildersleeve, G. Lodge : Latin grammar, Nelson, 1895

呉 茂一：ラテン語入門，岩波書店，1952

泉井久之助：ラテン広文典，白水社，1952

大村雄治：大村実習ラテン語，白水社，1963

樋口勝彦，藤井 昇：詳解ラテン文法，研究社，1963

松平千秋，国原吉之助：新ラテン文法，南江堂，1968

有田 潤：ラテン文法表，白水社，1984

M. アモリス：ラテン語の学び方，南窓社，1970

小林 標：独習者のための楽しく学ぶラテン語，大学書林，1992

前島儀一郎：英独仏語・古典語比較文法，大学書林，1989

筆者自ら集めたものを除き，文例の採集にあたっては，以下の5冊に負う所が多い。

A. Cart, P. Grimal, J. Lemaire, R. Noinville : Grammaire latine, Nathan, 1955

M. Bios : Syntaxe Latine, Vuibert, 1965

G. François : Grammaire latine, H. Dessain, 1976

M. Lavency : VSVS, Description du latin classique en vue de la lecture des auteurs, Duculot,
1985

A. Ernout, F. Thomas : Syntaxe Latine, Klincksieck, 1951